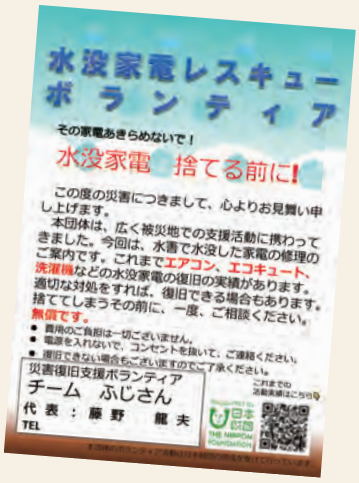
私のネクストステージ
―退職者への質問状― Vol.54

水没した家電製品を復活させて被災者を笑顔に



被災地で配っているチラシ

「災害復旧支援 チームふじさん」代表／元会社員

藤野 龍夫さん（72歳）2020年退職

【ふじの・たつお】1952年、京都府出身。1973年、中日本航空に入社して航空整備士となり、ヘリコプターの整備を担当する。地元である愛知県小牧市では「災害ボランティアネットの会」の他、高齢者や障がい者の生活を支援する「一寸奉仕」の活動も行っている。

――藤野さんは現在、能登半島地震の被災地で支援活動を続けられるなど全国の災害被災地でボランティア活動をされていますが、現役時代はどんな仕事をされていたのですか。

21歳の時に愛知県にある飛行機・ヘリコプターの総合航空会社に入社して以来、航空整備士一筋の職業人生でした。40歳を過ぎた頃からは、三重県や青森県など自治体で組織された防災航空隊にも派遣されるようになり、仕事としていろいろな災害とも向き合ってきました。

――何歳の時に退職され、その後はどのように過ごされているのでしょう？

定年の65歳までは常勤で、その後は68歳まで非常勤として勤めました。68歳で完全に退職してからは年金生活に入りました。子どもや孫はいますが、妻と死別してからは一人暮らしの身なので、自由気ままに各地の被災地に駆けつけてはボランティア活動に専念しています。

――ボランティアとして被災地支援に関わるようになったきっかけは、何だったのですか。

福島県に住む知人がいるのですが、原子力発電所の事故後に帰還困難区域となり、震災から1年経っても自宅に戻れないという話を聞きました。同じように帰還できていない人が大勢いることを知り、私は心を痛めました。自分たちは電気を使い何不自由ない生活ができているのに、その電気を作る原子力発電所の事故の影響で苦しんでいる福島の人々の姿を見て、「自分にも何かお手伝いができないか？　やるべきことがあるのではないか？」。そう思ったことがきっかけとなり、被災地で活動することにしました。

当時は常勤で働いていたため、休日を利用して、まずはボランティア募集のあった南相馬市に行きました。活動をする中で原発事故の被害の大きさを目の当たりにしてからは毎月1～2回の頻度で、3泊4日～1週間の活動をするようになりました。

――具体的に、どのような活動を？

被災地に入ってまず目についたのは、捨てられる家電製品の多さでした。辺り一面を覆うほど捨てられていた家電製品の中には、まだまだ使えそうな物がたくさんありました。それも洗濯機や冷蔵庫、テレビ、エアコン、電気給湯器など大型で高価な物ほど、ゴミとして捨てられていたのです。その状況を見て私は何とかしたいと考えました。航空整備士という仕事柄、電子・電気関連の知識と技術を身につけていましたし、電気回路図も読めるので、それを応用して家電製品の修理を始めました。

――とは言え、一度泥や水をかぶってしまった家電製品は、使えない気がしますが…。

皆さん、そう思われているようですが、泥や水をかぶった家電製品でも洗浄して完全に乾燥させれば復活します。洗濯機

被災地で捨てられた家電製品の山。藤野さんにとっては「宝の山」。被災地ではよそから不審な輩がやって来て、「家電製品を処分してあげますよ」と言って、家電製品を持っていくことも。お金になるエアコンの室外機だけを配管から切断し持っていかれることもある

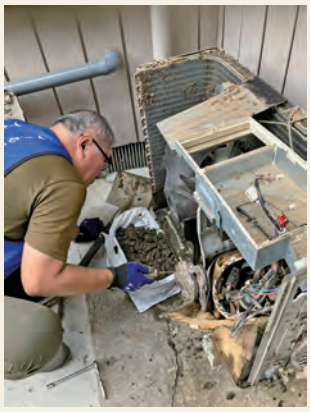
被災地で道路をふさいだ倒壊家屋。「災害復旧支援 チームふじさん」では、重機を使って撤去作業も行うこともある

にしても稼働部分はモーターだけですし、もともと防水機能がついていますからね。濡れた状態のまま電源を入れれば壊れるかもしれませんが、そうでなければ大抵は直せます。高価だけど捨てるしかないとあきらめていた洗濯機やエアコンを修理して動き出すと、皆さん感動されます。

ある方は、新築の家に入居してわずか

被災した屋外設置の電気給湯機

電気給湯器を修理する藤野さん。被災地では修理後に高額な請求をする悪徳業者やボランティアを騙り窃盗する輩もいるため、藤野さんたちはまず公的機関で自分たちのことを説明し信頼を得てから活動している



泥をかぶったエアコンも修理できる

2週間で被災されていました。エアコン5台と電気給湯器が水をかぶっていましたが、それらをすべて復活できた時には非常に喜ばれていましたね。

冷蔵庫は常時電源が入っているため、浸水でショートしていることも多いですが、エアコンについては約9割、電気給湯器についても8割くらいは修理して使えるようになります。エアコンだけでも、今までに400台近く復活させています。

——被災した家電製品を修理できれば、家計の面からも環境の面からもすごく助かりますね。

もっと多くの家電製品を復活させたいですし、その他の部分でも被災者の皆さんの力になりたいという想いもあって、2017年からは仲間とチームを組んで活動しています。その後「災害復旧支援 チームふじさん」を結成し、2021年8月豪雨の被害を受けた広島県の復旧支援から活動しています。28名の会員は職業も居住地もバラバラで、年代的にはシニアが多いです。会員以外に、被災地で一緒に活動してくれるボランティアも受け入れています。

——活動で心掛けていることは?

一番は被災者の方に寄り添うことです。被災した家屋、倒壊した家屋をゴミ扱いする人も多いですが、ゴミやがれきではなく、一つ一つにその家に暮らしていた方の想いや思い出があり、貴重品です。我が家、我が身が被災したときと同じ気持ちで、丁寧に扱うようにしています。

——藤野さんが被災地での活動を長く続けられている要因は、何だとお考えですか。

「災害に遭うなんて他人事だと思っていた」「なぜ、こんなことになったのか…」と悲嘆にくれていた被災者の方も、家電修理やその他の支援を通じて言葉を交わすうちに、徐々に心を開いてくれるようになります。いつも不安な表情を浮かべていた方に笑顔が見られるようになったり、私たちのことを自分の親戚のように信頼してくれて、深いつながりが生まれることもあります。そうやって被災者の皆さんが元の生活を取り戻していかれるお手伝いができることが私自身の喜びであり、活動を続ける原動力になっています。

世間では水をかぶった家電製品は捨てるか処分するのが当たり前と考える人が多いですが、私にはその考え方を払拭させたいという想いもあります。日本には電気技術を持ったシニアが大勢いますし、持っていなくても、私たちが教えて修理できるようになったシニアもいます。シニアでもできることは、たくさんあります。

「できる時に、できる所で、できる事をする。」が私のモットーです。体力、気力の続く限り被災地に足を運んでボランティア活動をしたいですし、家電製品の修理は体力的に衰えてもできる作業ですので、ずっと続けていきたいと思っています。